

学校現場の「学級づくり」を支える教育センターの取組
～「スリンプル・プログラム」のスムーズな導入に向けて～（1年次）

島根県教育センター浜田教育センター
教育相談スタッフ 共同研究

目 次

【要 旨】	1
1 研究の背景	1
(1) 島根県内における不登校をめぐる近年の状況	1
(2) 改訂版生徒指導提要から	3
2 研究の目的	3
3 実践および研究の方法	4
(1) 学級づくり等についての意識調査	4
(2) 能力開発研修に「スリンプル・プログラム」の講座を開設	4
(3) 「スリンプル・プログラム」の伝統校、先進校・教育委員会等への取材	4
4 実践および研究の内容	4
(1) 学級づくり等についての意識調査	4
(2) 能力開発研修に「スリンプル・プログラム」の講座を開設	8
(3) 「スリンプル・プログラム」の伝統校、先進校・教育委員会等への取材	10
5 実践および研究の考察とまとめ	21
(1) 今年度の取組を振り返って	21
(2) 2年次の実践研究に向けて	22
【引用文献】	23
【参考文献】	23

学校現場の「学級づくり」を支える教育センターの取組 ～「スリンプル・プログラム」のスムーズな導入に向けて～（１年次）

島根県教育センター 浜田教育センター 教育相談スタッフ 共同研究

【 要 旨 】

不登校の児童生徒数は近年、全国的に増加傾向に歯止めがかかっていない状況があり、島根県も同様の状況にある。令和４年に改訂された生徒指導提要では、不登校の未然防止に向けて新たに積極的生徒指導に取り組む必要性が謳われている。具体的な不登校の未然防止のためのアプローチとして様々な取組や方法があるが、その一つの方法として、児童生徒同士が互いにかかわる力を高めることで、児童生徒の関係づくりが進み、不登校の未然防止につながる事が考えられる。

児童生徒同士が、互いにかかわる力を高めるための具体的な方法を学校に取り入れる一つの方法として、既に全国の多くの学校で取り組まれ、実績のある「スリンプル・プログラム」に浜田教育センター教育相談スタッフ（以下、当センターと略）の共同研究として着目した。

学校現場で「スリンプル・プログラム」をスムーズに導入し、継続的に取り組み続けていくためのヒントについて、他県の先進校や既に県内で取り組んでいる学校等を訪問した。また、これから積極的生徒指導に力を入れたいと考えている学校に「スリンプル・プログラム」の導入を促すために、どのような働きかけが有用であるかを探り、不登校未然防止の学級づくり、仲間づくりに取り組む学校現場をどのように支援していけばよいのかを２年間の研究を通して明らかにしていく。

【キーワード：スリンプル・プログラム 不登校未然防止 生徒指導提要 児童生徒のかかわり】

１ 研究の背景

（１）島根県内における不登校をめぐる近年の状況

図１は、過去５年間の島根県小中学校の不登校児童生徒数の推移を表すグラフである。グラ

フには表されていないが過去７年間に渡って、不登校児童生徒の実数、1,000人当たりの比率、いずれも全国平均と比べても高い傾向で推移している。図

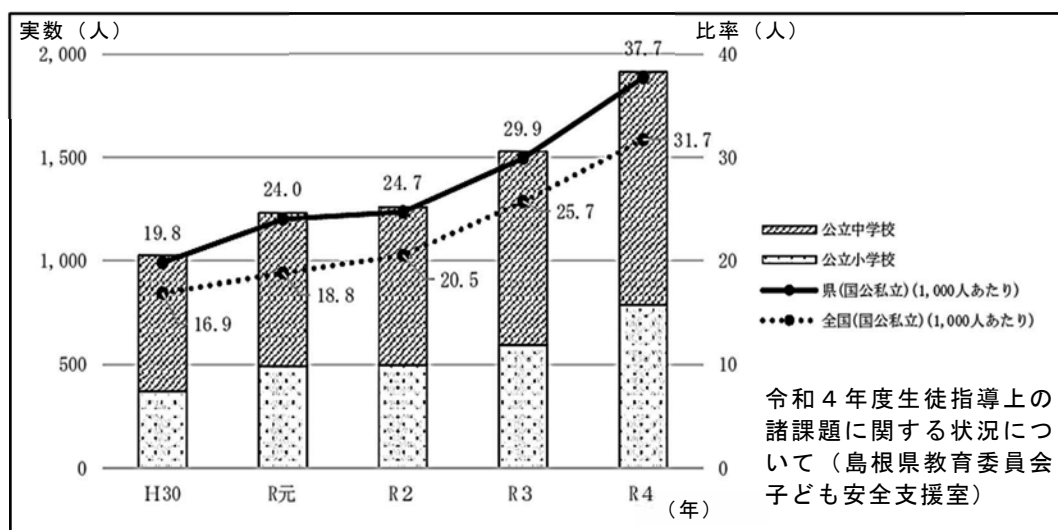


図１ 島根県小中学校の不登校児童生徒数の推移

2は高等学校の不登校生徒の推移を表すグラフである。公立の高等学校において、令和4年度の不登校生徒数は前年比微減となつてはいるが、私立学校も含めると1,000人当たりの不登校者の比率は増加している状態である。令和4年度は、グラフに示されているように、小中高等学校すべての校種において、全国平均と比べても不登校児童生徒数が多く、島根県の教育における大きな課題の一つであると言える。

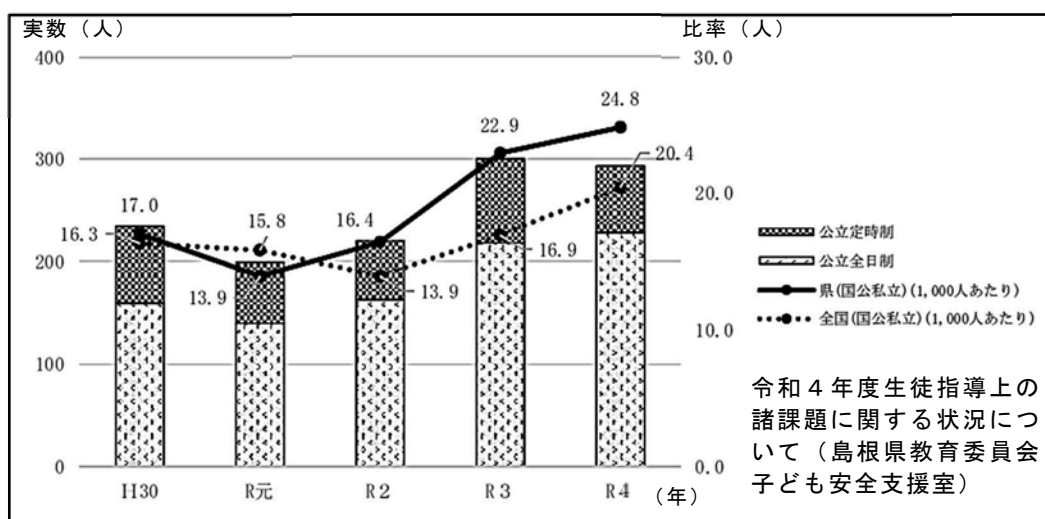


図2 高等学校の不登校生徒数の推移

当センターにも不登校を主訴とした相談は多く、不登校の状態になってからの学校復帰には多くのエネルギーを費やすことが相談に対応してきた私たちとしても実感としてある。

小学校・中学校の長期欠席のうち不登校の状況（公立）【 】内は対前年比

- ・公立小学校・中学校の不登校児童生徒数の合計は1,911人【+383人】。
- ・1,000人当たりの人数は37.9人【+7.9人】。
- ・不登校児童生徒数、1,000人当たりの人数ともに7年連続の増加。
- ・県内1,000人当たりの人数（37.7人）は、全国平均の31.7人を上回っている。
- ・校種別では、小学校では788人【+193人】、中学校では1,123人【+190人】。

高等学校の長期欠席のうち不登校の状況（公立）【 】内は対前年比

- ・公立高等学校の不登校生徒数は293人【▲7人】。
- ・1,000人当たりの生徒数は22.1人【▲0.4人】。
- ・生徒数、1,000人当たりの生徒数ともに微減に転じた。
- ・県内1,000人当たりの生徒数（24.8人）は、全国平均の20.4人を上回っている。
- ・定時制では減少に転じたが、全日制では3年連続で増加した。

令和4年度生徒指導上の諸課題に関する状況について（島根県教育委員会子ども安全支援室）

不登校になった児童生徒の背景は個々のケースによって様々であるが、近年の新型コロナウイルスの流行により、様々な教育活動や学校行事が制限され、児童生徒同士のかかわりや協働体験の機会の消失などもあり、学校での児童生徒同士の人間関係が希薄になっていることも不登校児童生徒の増加と関連性があるのではないかと考えた。いずれにせよ、児童生徒同士の関係改善がなされることは、児童生徒が学校に行きやすくなる、不登校の未然防止につながる大きな要因になるのではないかと考える。

(2) 改訂版生徒指導提要から

令和4年12月に初めて改訂された生徒指導提要においては、積極的な生徒指導を充実させることが、改訂の大きなポイントとして挙げられている。これまでの課題解決的な指導だけでなく成長を促す指導（発達支持的生徒指導、課題未然防止教育）など、より積極的な生徒指導の重要性が謳われており、児童生徒の課題への対応を時間軸や対象、課題性という観点から類別し、図3のように、2軸3類4層に構造化された重層的支援構造として示されている。

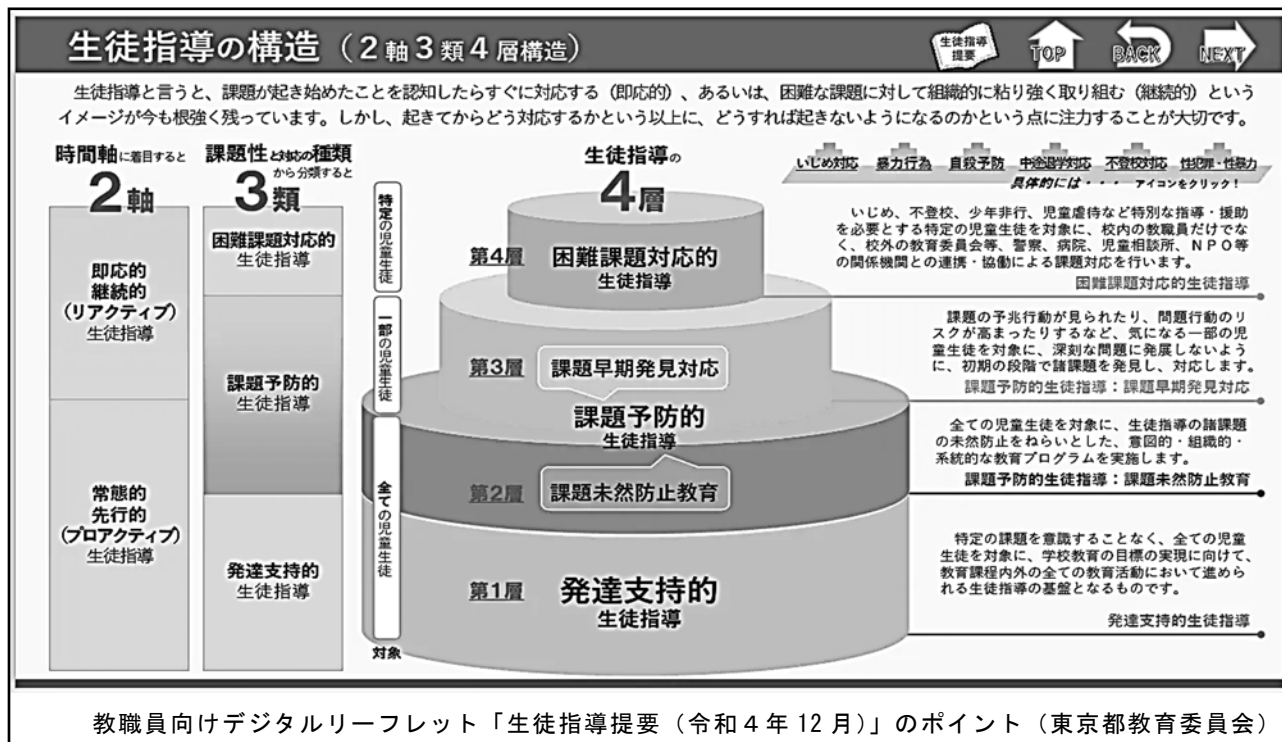


図3 生徒指導提要における重層的支援構造

特に、二つの軸で示されている時間軸に沿って考えれば、常態的先行的な指導（プロアクティブな指導）が不登校の未然防止に有効であるとされてはいるものの、各学校が「未然防止」のために具体的な取組をしようとする場合、担任個々による取組や指導といった「教職員個々の働きかけ」に依る指導が多いのではないだろうか。

2 研究の目的

学校現場において、積極的な生徒指導によって未然防止のための取組をしたいと考えたとき、学校現場の教職員それぞれが対応策を考えるのではなく、考え方や拠り所として活用できる取組、を後押しすることができれば、各学校の積極的な生徒指導も進むのではないだろうか。また、当センターとしても、これまで担ってきた、事後に対応する「教育相談」というリアクティブな対応よりも前段階に踏み込んだ支援ができることにつながるのではないかと考えた。

そこで、いくつかの積極的な児童生徒支援につながる具体的なアプローチ方法の中から、既に全国で実施されている「スリンプル・プログラム」について研究し、ニーズのある学校現場へのスムーズな導入のためのポイントや、学校で続けて取り組んでいくためのポイントなどを明らかにすることで、各学校の「学級づくり」に教育センターがどのように関わり、支援していくことができるのか、その方法を探りたいと考え、今年度の研究の目的を次のように設定した。

不登校未然防止の学級づくりに資する「スリンプル・プログラム」の学校現場への導入と継続的な取組のために、教育センターがどのように支援できるかを明らかにする。

3 実践および研究の方法

(1) 学級づくり等についての意識調査

新任教職員研修、教職経験6年目研修、中堅教諭等資質向上研修の折に、学校現場において「学級づくり・仲間づくり」のどのような点に困っているのかなど任意のアンケートを行い、教職員のニーズを調査し、よりニーズに合った有効な学校現場への支援方法について検討する資料を収集し、当センターで取り組むべき内容を具体化する調査を行う。

(2) 能力開発研修に「スリンプル・プログラム」の講座を開設

当センターでスリンプル・プログラムに関する研究を行うだけでなく、スリンプル・プログラム開発者の曾山和彦教授（名城大学教授）から直接指導を受けた。また、より多くの島根県内の教職員にも「スリンプル・プログラム」を知ってもらい、各学校で取り組んでもらえるよう、能力開発研修「学級づくり、仲間づくり講座」の講師に曾山教授を招き直接指導を受ける機会を設けることとした。

(3) 「スリンプル・プログラム」の伝統校、先進校・教育委員会等への取材

島根県内においても、すでに学校単位や市教育委員会単位で「スリンプル・プログラム」に取り組んでいる、あるいは取り組み始めている学校、教育委員会があることが分かった。また、県外では長年に渡って継続的に「スリンプル・プログラム」に取り組んでいる先進校があり、それらの学校を取材し、継続的に取組を続けていくためには、どのようなエッセンスがあればよいのか、あるいは校内の体制をどのように整えればよいのかを取材することにした。

・伝統校、先進校、教育委員会への取材

愛知県あま市立七宝中学校

愛知県西尾市立一色中学校

島根県出雲市教育委員会

・現在進行形で取り組んでいる学校等への取材

島根県益田市立東陽中学校

島根県雲南市教育委員会（不登校対策プロジェクト）

4 実践および研究の内容

(1) 学級づくり等についての意識調査

島根県内の教職員の学級づくり・仲間づくりに関する、課題や現状を把握することを目的として、以下の方法でアンケートを行い、134名からの回答を得ることができた。

①アンケートの方法

対象者：島根県内の公立学校に勤務する教職員

方法：新任教職員研修、教職経験6年目研修、中堅教諭等資質向上研修の受講者にアンケートを示し、任意により回答。（以下「新任」「6年目」「中堅」と記す）

期間：令和5年8月～9月 回答数：134名

その他：アンケートはGoogleフォームにより配布・回収を行った。

②アンケートの項目及び結果

設問1 新型コロナウイルスの流行前後の学級集団の変化に対する意識調査の結果を図4に示す。図4から学級集団の変化を感じている教職員は全体では約39%、感じていない教職員は37%であった。教職経験による違いでは、中堅では感じていない教職員が感じている教職員に比較して多いが、6年目では逆転しており、教職経験年数によって、学級集団の変化について感じ方に違いがあった。変化を感じたことがある受講者の自由記述は、次のようなものがあつた。（一部抜粋）

- ・子どもたちのかかわりが減り、コミュニケーションをとることや集団行動への抵抗感が増している。
- ・マスク着用による表情の読み取りの困難や身体接触への抵抗も見られる。
- ・ICT機器の活用は増えたが、人間関係の経験の減少や不登校の増加も懸念される。
- ・全体的にかかわり合いが薄くなり、個別化が進んだ。集団への帰属意識の低さや集団行動の苦手さが見られる。

コロナ禍の人とのかかわりや交流などの人的環境、教室内の机配置や教材を共有しないなどの物的環境が、学級集団に与えた変化について、教職員が学校現場で感じているエピソードについての記述が多くあつた。

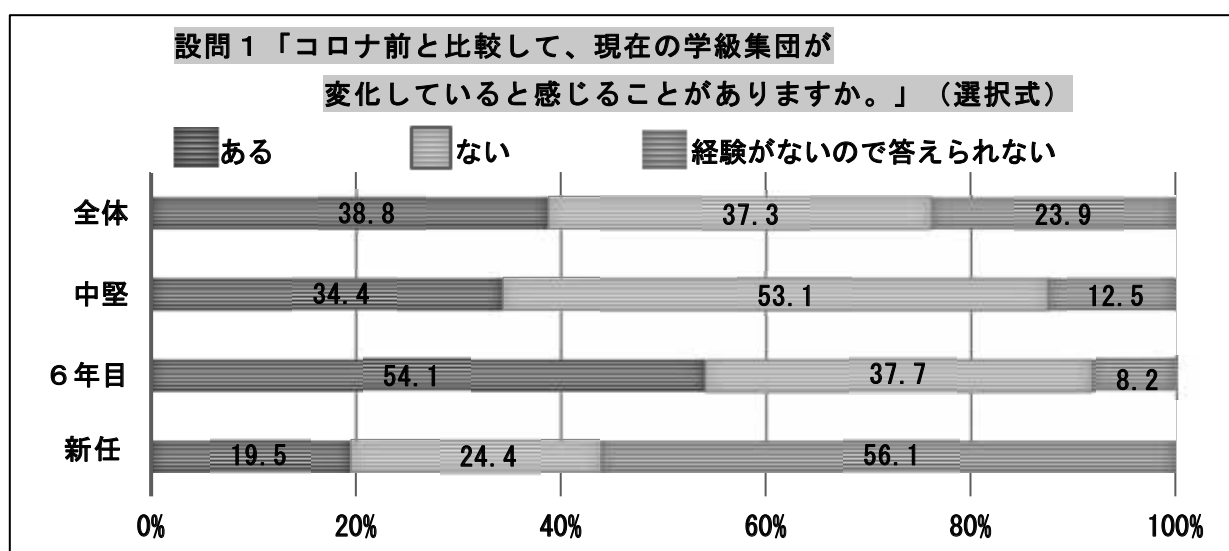


図4 新型コロナウイルスの流行前後の学級集団の変化に対する意識

設問2 学級づくりや仲間づくりでの難しさに対する意識調査の結果を図5に示す。難しさを感じている教職員は、全体では、「とても感じている」、「感じている」を合わせると約62%であり、半数以上の教職員は学級づくりや仲間づくりに難しさを感じているという結果であった。経験別では新任が71%、6年目は62%、中堅は50%であった。特に教職経験が少ないほど難しさを感じている結果であった。

新任者研修の受講者の自由記述には、次のようなものがあつた。（一部抜粋）

- ・個別の指導や全体のかかわり方を考える必要がある。
- ・友達関係の構築、学級の落ち着きのなさなども課題となっている。
- ・コミュニケーションや人間関係の課題が多い。

6年目研修の受講者の自由記述には、次のようなものがあった。（一部抜粋）

- ・担任だけでは手が足りず、個別の支援が必要な子どもが多い。
- ・個別支援の児童が学級集団で生活するための支援内容やかかわり方にも悩みがある。
- ・生徒同士の結びつきが弱くなり、かかわり方がわからない子どももいる。
- ・多様性を受け入れる土壌を作るためには、大人の介入や意図的なかかわり方についての判断が求められる。

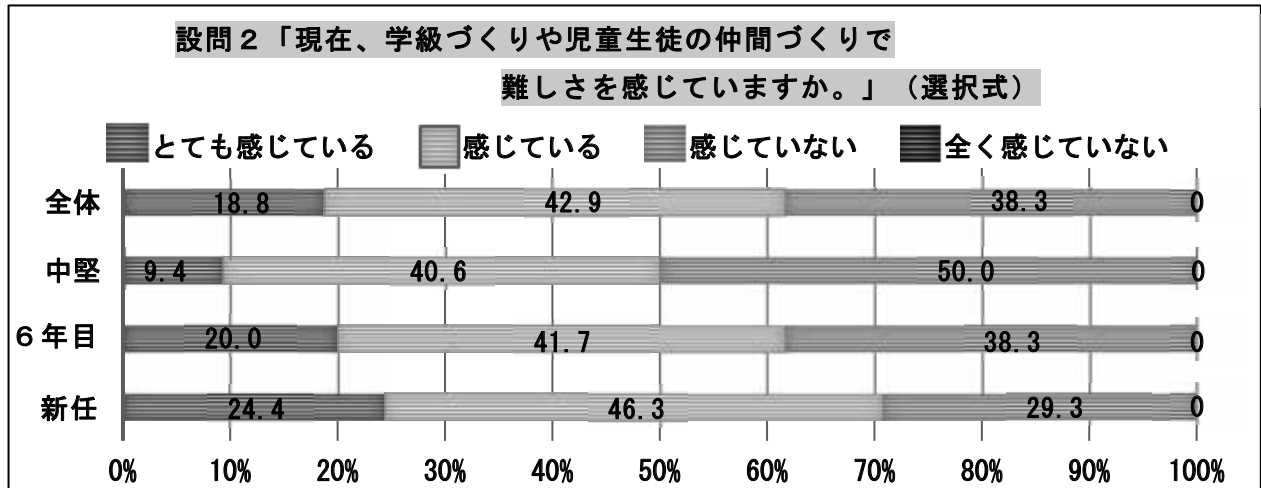


図5 学級づくりや児童生徒の仲間づくりの難しさを感じているか

設問3 学級づくり、仲間づくりについて、校内での学習会等の開催の有無の結果については、図6に示す。校内での研修機会については、全体では約50%が「ある」という回答だった。多忙な学校現場であっても、研修職員会の時間等を活用し学級づくりや仲間づくりなどをテーマとして研修を行っている学校が一定数あることがうかがえる結果であった。

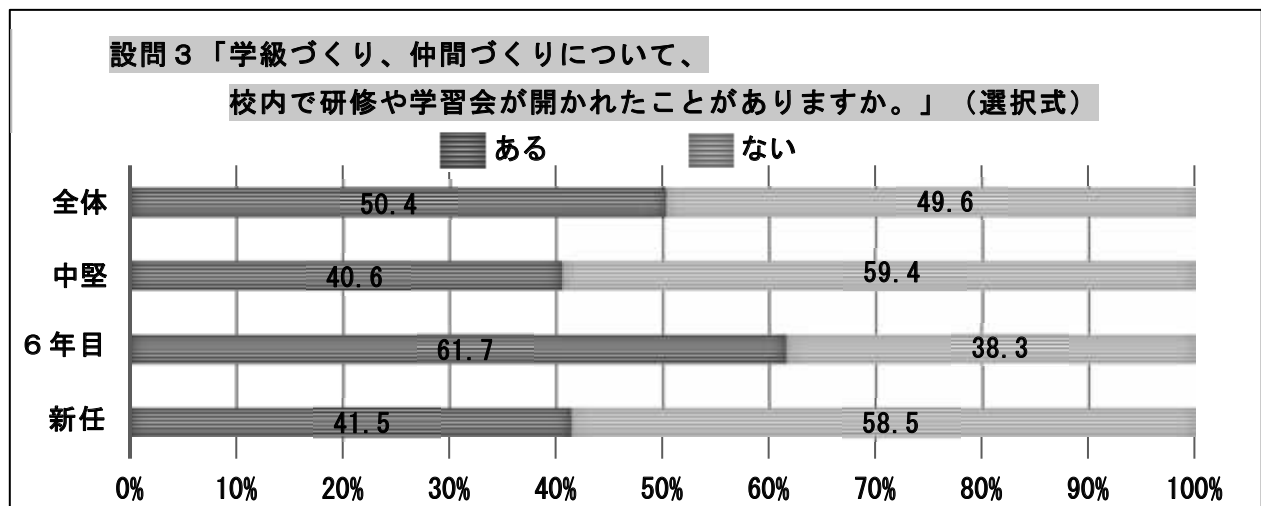


図6 学級づくり、仲間づくりについて校内での研修会や学習会開催について

設問4 困っていると感じていることの意識調査の結果を表1に示す。「業務上困っていること」については、新任、6年目では「授業づくり」の回答が最も多く、中堅では2番目に多い結果であった。また、「学級づくりや仲間づくり」については、新任、6年目では2番目に多く、中堅では5番目の結果であった。また、中堅で最も多い回答は「校務分掌業務」

であった。経験年数によって、教職員の困っている内容は異なっており、「学級づくりや仲間づくり」については、経験の浅い教職員ほど、困難さを強く抱いていることが明らかとなった。

設問4「あなたが現在の業務上、

『困っている』と感じられることを教えてください。」（複数選択可）

表1 業務上困っていると感じていること（経験年数別）

新任			6年目			中堅		
位	困っていること	回数	位	困っていること	回数	位	困っていること	回数
1	授業づくり	24	1	授業づくり	36	1	校務分掌業務	18
2	学級づくりや仲間づくり	20	2	学級づくりや仲間づくり	35	2	授業づくり	15
3	子どもや保護者との関係	12	3	校務分掌業務	31	3	校内の人間関係	12
4	校務分掌業務	11	4	子どもや保護者との関係	19	4	子どもや保護者との関係	9
5	部活動	10	5	校内の人間関係	8	5	学級づくりや仲間づくり	4
6	校内の人間関係	6	6	部活動	6	5	部活動	4

設問5 うまくっている学級づくりの「キーワード」の単語を抽出し、出現回数が四つ以上の単語をまとめると表2のとおりとなった。出現回数が10回以上の単語を見ると「笑顔」「安心」「協力」「楽しい」「思いやり」など、ポジティブな要素のある単語が挙げられていた。4回から9回までの出現回数のキーワードについても多くがポジティブな要素の語彙であった。また、学級を子どもが、安心、安全と感ずることができるときの基盤として「自律」「自治」「自立」「安全」などのキーワードなどが挙がっていた。

設問5「うまくいっている学級づくり」のキーワードとして

考えられる「単語」を自由にいくつでもお書きください。」（自由記述）

表2 「うまくいっている学級づくり」のキーワードとして挙げられた単語

位	単語	出現回数	位	単語	出現回数	位	単語	出現回数
1	笑顔	26	7	規律	7	1 2	自立	4
2	安心	17	7	信頼関係	7	1 2	安全	4
3	協力	15	9	助け合う	6	1 2	仲良し	4
4	楽しい	13	9	認める	6	1 2	共感	4
4	思いやり	13	1 1	自治	5	1 2	相談	4
6	信頼	9	1 2	協働	4	1 2	あたたかい	4

設問6 週1回10分間程度の集団づくりプログラムの継続的な実施についての結果を図7に示す。全体では「できそうだ」「時期によってはできる」と回答した教職員は約83%で、

多くの教職員が現状の学校においても、週1回10分程度の集団づくりプログラムが実施可能であると考えている結果であった。特に6年目の教職員については、「できそう」約42%、「時期によってはできる」約47%であり、89%の教職員が実施可能であると回答しており、経験年数別では最も高い結果であった。

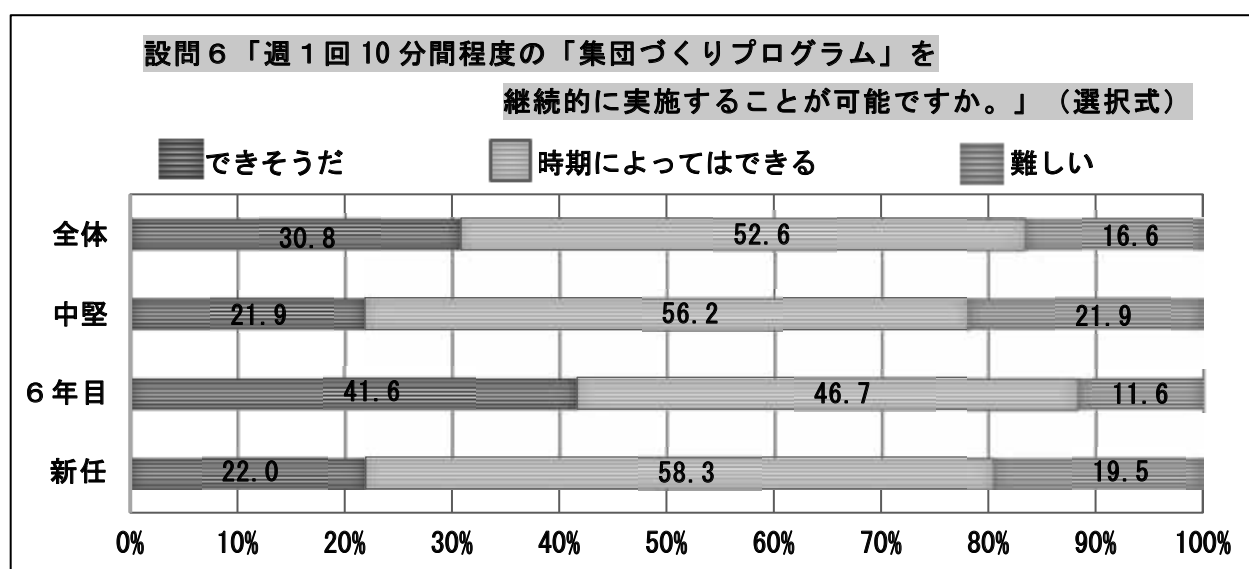


図7 集団づくりプログラムの継続的な実施について

設問7 「スリンプル・プログラム」を聞いたことがあるかについての結果を図8に示す。全体では「取り組んでいる」「取り組んだことがある」「知っている」を合わせると、20%であった。島根県内では一部の市町や学校で「スリンプル・プログラム」を導入していることから、一定数の教職員が「スリンプル・プログラム」を実施した経験があることが今回のアンケートでも明らかになった。しかし、島根県内の教職員全体から見ると、「スリンプル・プログラム」を知らない教職員の割合は80%と高い結果であった。

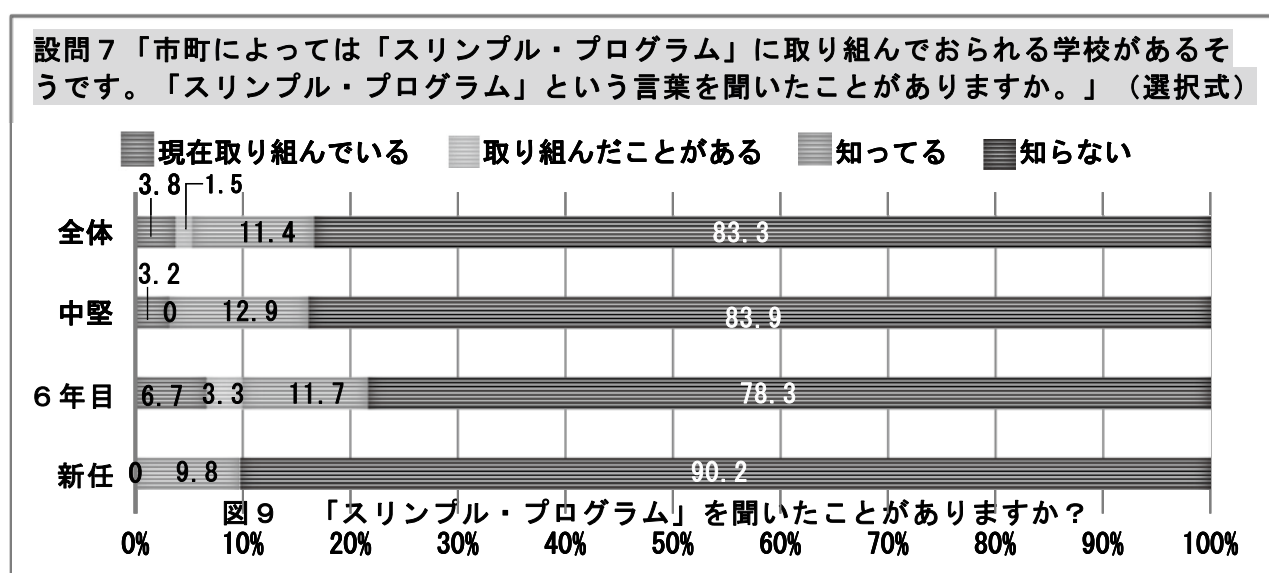


図8 「スリンプル・プログラム」を聞いたことがありますか

(2) 能力開発研修に「スリンプル・プログラム」の講座を開設

当センターが主管する生徒指導に関する能力開発研修として「学級づくり仲間づくり講座」（昨年までの２年間はコロナ禍による授業形態移行ニーズを考え「オンラインでもデキル！学級づくり仲間づくり講座」として実施）を開設している。新型コロナウイルス対応も５類に移行し、ピークを越えた現在、コロナ流行期間に、さらに児童生徒同士の関係づくりが変化したのではないかと予想される。

また、改訂された生徒指導提要により日常的で積極的な生徒指導が求められている現状があることと、本研究で取り組んでいる「県内における積極的・未然防止的な視点による活動を県内に広める」という視点にも合致していることから、名城大学の曾山和彦教授を講師による「スリンプル・プログラム」の研修を設定することとした。講師の都合もあり、オンラインによる講座の実施となったが、島根県内だけでなく講座連携をしている鳥取県、埼玉県からも受講希望がある講座となった。

①講座の概要

日 時：令和５年６月２８日（水） １０時～１２時 １３時～１５時

形 式：オンライン（講師と各受講者をオンラインでつなぐ）

受講者：小学校、中学校、義務教育学校、高等学校、特別支援学校の教職員

（鳥取県、埼玉県の教職員にも連携講座として実施） ２６名＋管理職２名

②講座のねらいに対する評価

今回の講座を通じて、「スリンプル・プログラム」について周知を図るだけでなく、受講後に各学校で実際に活動に取り組んでももらいたいと考え、この講座のねらいを次の２点に設定した。また、この二つのねらいに対する受講者の意識の変化は表３のようであった。

○実際の事例を通し、学級づくり・仲間づくりのポイントについて理解を深める。

○研修後に学校現場で実践したい取組のアイデアを得る。

表３ 受講者の研修前後のねらいに対する意識の推移

受講者に提示した この講座のねらい	研修の 前後	そう思う		少しそう思う		あまりそう 思わない		そう思わない	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
実際の事例を通し、学級づくり仲間づくりのポイントについて理解を深める。	前	６人	23%	17人	65%	３人	12%	０人	0%
	後	20人	77%	６人	23%	０人	0%	０人	0%
研修後に学校現場で実践したい取組のアイデアを得る。	前	９人	35%	16人	61%	１人	4%	０人	0%
	後	21人	81%	５人	19%	０人	0%	０人	0%

二つのねらいに対する受講後の評価はいずれも、「そう思う」「少しそう思う」の肯定的な評価に移行しており、この研修でねらっていた点は達成できたと考えている。また、下記の受講者の自由記述欄からも積極的な意見が多数寄せられた。新たに意識した内容として、「スリンプル・プログラム」の構造に対する理解が進んだことや、児童生徒同士のかわり方を深めるための気づきなどが、今後の具体的な取組としても、自学級での取組から校内に広めていきたい、教職員集団づくりから始めていきたいといった、校内に取り入れる展望が語られており、本研修を設定した意図に合った結果となったと考えられる。曾山教授が「打ち上げ花火を継続

していく」と表現されているように、今回の研修が一過性のもので終わることなく、次年度においてもこの能力開発研修を継続して開催することで、島根県内の多くの教職員に「スリンプル・プログラム」の周知に努め、アンケートの記述にあるような学校現場への広がりとプログラムの理解を深める支援につないでいくことができると考えている。

■今回の研修で理解した内容、新たに意識した内容（受講者の自由記述から）

- ・スリンプル・プログラムが SST と SGE を兼ねた忙しい現場で取り組みやすく継続しやすい内容のものであること、その意義や型と教師の意識すべき内容について理解できた。先進校での取り組みの様子や、教師集団が共通理解することの大切さが分かった。
- ・全校（出雲市）の取り組みで毎週アドジャンに取り組んでいるが、校内研修や資料で流れを簡単に理解した程度でやっていた。今回の研修で、活動の意義や価値付けなど、実践映像を多く見せていただいたことでよりイメージをもつことができた。
- ・SST と SGE の違いや大切なポイントが分かった。価値付けでほめること、勇気づけること、認めることなど、人が人になるには人とのかかわりが必要だと分かった。
- ・アドジャンをスタートとして、学級の仲間づくりの視点を学び、1分間スピーチの功罪を理解した。先日、生徒が声を震わせながら終礼での1分間スピーチをした。自分がいかに心を考えず、一辺倒な指導をしてきたかを痛感した。今回の研修を受けていなければ、振り返らず、改善せずにはいたと思う。研修を受けてよかった。
- ・子どもたちは、人との関わりの中で成長していくということを改めて感じた。コロナ禍で、人と関わる機会の多いはずの学校でも、関わりをもつ機会が希薄になってしまい、子どもたちは「友達と一緒に何かをする」ことを求めていると感じた。
- ・今回研修でアドジャン等を活用した関わりづくりについて学ぶことができた。現在「〇〇トーク」や「〇〇タイム」という名前で行う学校も増えている。そのやり方と効果、注意点について丁寧に説明していただきとても勉強になった。今の生徒の現状を見ていて必要な能力だとすごく感じる事ができた。自分にできるところで実践につなげていきたい。

■今後、校内で実践・普及しようとする具体案

- ・益田市教育委員会の紹介から、昨年度校内の4～6年で、「ますますタイム」に取り組んでいる。始めたばかりのたどたどしい活動であっても、3 人の担任はその効果を感じることができたので、今年度は研究担当の立場から学校全体で週1の活動に広げることとなった。教務の協力で週案に組み込むことができた。まだ始めたばかりなので「思考の一枚岩」はできなくても「行動の一枚岩」はできつつある。今後も細く長く「ますますタイム」の校内ミニ研修を続け、まずは教職員集団が活動の価値を理解したり、納得したりした状態で、積み重ねていきたいと思う。
- ・本校では今年度から、全校で「だんだんタイム」に取り組んでいる。「アドジャン」「二者択一」に取り組んでいるので、「いいとこ四面鏡」の取り組み方、昨年度取り組んだ時の子どもたちのつぶやきを職員会議のミニ研修で伝えていこうと思う。
- ・アドジャンや質問じゃんけんなどの取組を実践してみたい。他の教職員にも研修報告等で周知したい。そして「かかわり」を大切に教育活動を仕組んでいきたい。
- ・まずは学級でアドジャンをはじめとした取り組みを始めていきたい。10 分間と短い時間での活動が可能だと知ったので、席替えなどの機会を使って学級内の人間関係づくりに活用したい。修学旅行なども控えているため学級づくり、派生して学年での人間関係づくりに生かしていきたい。
- ・まずは自分の学級から始めてみて、少しずつ周りにも勧められたらと思う。教師の姿、言葉が鏡となって子どもたちに映るという言葉で自分のこれまでの関わりを振り返るきっかけとなった。自分の言動を見直し、より良い関わりをしていけたらと思います。
- ・いきなり一枚岩ではいけないと思うので、まずは自分の学級で週に 1 回〇〇タイムを取り入れてみて、自分で効果やエビデンスを確かめてみたい。そこから、その変化をまず学年部に共有したい。

（3）「スリンプル・プログラム」の伝統校、先進校・教育委員会等への取材

今回、この「スリンプル・プログラム」を研究テーマとして取り上げたいと考えた理由の一つに、全国各地の学校で既に多くの実践がなされ、広まっているということが挙げられる。幸いにも島根県内においても、既に出雲市教育委員会が市を挙げて「スリンプル・プログラム」

に取り組んでおり、これまでの取組について出雲市教育委員会に取材したいと考えた。また、令和4年度に当センターの長期研修員として「スリンプル・プログラム」を研究主題として取り組んだ教諭が所属する益田市立東陽中学校でも、今年度から「スリンプル・プログラム」を取り入れて活動を展開しようとしている。さらに、雲南市教育委員会が3年間に渡って曾山教授を招いた不登校対策プロジェクトの系統的な取組を教育委員会として進めているなど、県内にも「スリンプル・プログラム」の実践に取り組んでいる学校や団体が増えつつある。

「スリンプル・プログラム」に限らず、様々な方法で学級づくりや集団づくりに取り組むアプローチがあるものの、多くの学校でその取組を継続していくことの難しさが挙げられている。

「スリンプル・プログラム」開発者の曾山和彦教授は「同じプログラムを10年続ければ、それはその学校独自の文化になる」と語っている。その10年に近い実践を継続して行っている先進的な学校に取材に出向き、「どうすれば続けられるのか」「続けていくための秘訣は何か」「スリンプル・プログラムを通じてどのようなかわりの力を育めたと感じておられるのか」など、先進校ならではの実績に裏付けされた知見を聞きたいと考え、愛知県の2校の先進校を訪ねた。

【先進校2校の概要】

- ・愛知県あま市立七宝中学校（しっぴータイム） 全校生徒 400 人程度

「スリンプル・プログラム」導入は平成 27 年 今年度実践 9 年目

取材日：令和 5 年 11 月 27 日

取材内容：教頭と教務主任からの取材と1年生道徳の参観

- ・愛知県西尾市立一色中学校（しおさいタイム） 全校生徒 690 人程度

「スリンプル・プログラム」導入は平成 28 年 今年度実践 8 年目

取材日：令和 5 年 11 月 28 日

取材内容：教頭と教務主任からの取材と全学年のスリンプル・プログラムの授業公開の参観、曾山和彦教授による講義「曾山先生に学ぶ」に参加

①先進校：愛知県あま市立七宝中学校と愛知県西尾市立一色中学校の実践に学ぶ

愛知県あま市立七宝中学校は、名古屋市の西に隣接する、生徒数 400 人規模の中学校で、平成 27 年度から「スリンプル・プログラム」をスタートさせ、現在継続 9 年目に当たる学校である。昨年度には「スリンプル・プログラム」の自主研究発表会を開催されるなど、先駆的な取組をしておられ、曾山教授曰く「中学校のスリンプル・プログラム実践日本一」と評されている学校である。取材訪問日には、稲垣教頭と校内で主に「スリンプル・プログラム」を担当し実践を進めておられる教務主任の佐藤教諭にお話をうかがうことができた(図 9)。

翌日に取材に訪れた愛知県西尾市立一色中学校は、愛知県の南部の太平洋沿いに位置する全校 690 人規模の中学校で、「スリンプル・プログラム」導入 8 年目に当たる学校である。この日は学校において全学年、全学級で「スリンプル・プログラム」の公開授業があり、その前後の時間に、杉浦教頭ならびに教務主任の牧教諭から「スリンプル・プログラム」に取り組む校内体制についてのお話を伺い(図 10)、放課後には曾山教授による教職員向け講座に参加させていただいた。



図 9 七宝中の手引き



図 10 一色中の実践紹介

両校で続けておられる「プログラムの導入・継続へのポイント」が曾山和彦教授の著書の中でも、七宝中学校の佐藤教諭がまとめておられるので、この視点に沿って、取材させていただいた内容とともに紹介する。現在先進校であるどちらの学校も、同じようにさらに先行して取り組んでいる学校からノウハウや円滑な運営の仕方を学んできて、現状のスタイルを作っているとの話が印象的だった。

■「スリンプル・プログラム」推進のための組織「〇〇部会」を学校組織の中に位置付け

七宝中学校での実践開始当初は研究主任と各学年 1 名ずつの担当で、月 1 回程度、実践の反省や次回の活動について確認をしていた。「しっぴータイム」が根付いてきたことで「しっぴ一部会」として学校組織の中に位置づけ、「しっぴー主任」が旗振り役となり、実践の推進役として機能している。各学年から 2 名ずつの委員を出して、毎週火曜日の 1 校時に部会を設けて、やり方の「型」を整えている。

この取組を参考に、一色中学校でも校内推進組織として「しおさい部」を設置している。具体的な作成物等はこの後に紹介をするが、両校とも、このような推進部会を位置づけることで、教職員個々の負担を減らすことと、全校での統一した教職員の「一枚岩」の醸成に大きな役割を果たしていると考えられる。

これから導入する学校においても、まずは分掌内での位置付けから、このような先進校が取り組んでいる「部会」方式の運営が望ましいと考えられる。

■年間計画の作成と準備や共通指導案の作成

七宝中学校でも一色中学校も、年間に取り組んでいる「スリンプル・プログラム」の主な題材である「質問ジャンケン」「アドジャン」「二者択一」「いいところ四面鏡」の 4 種類（※3 年生は「1 分間スピーチ」を加えた 5 種類）のルーティンをあらかじめ決めており、実施する担任が迷うことなく、お題リストを 4 種類作成し、一つの演習で毎週異なるお題に取り組めるようにしているとのことだった。また、年間を見通した共通の指導案が準備されていることにより、異動により新たに赴任した教職員も、以前から在職している教職員も、同様な実践ができるように指導案集が作成されている。

■学級ごとに用意されている お題ボックス「スリンプル・プログラムセット」

図 11、12 は、一色中学校で撮影させてもらった「スリンプル・プログラムセット」である。各教室の教卓の引き出しの中に蓋つきの文書箱に用意されており、中身の変更も「しおさい部」の部員が定期的に行っているとのことだった。これは、七宝中学校でも同じ仕組みで取り組んでいるとのこと、お題に困ることもなく、担任の準備の省力化により継続性を高めている取組だと言える。また、同じ演習でもお題が替わるだけでなく、次年度以降も同じものを使用できるため、準備の負担軽減につながっている。また、この日、実際の「スリンプル・プログラム」の授業を見学させていただいた一色中学校では、活動後に生徒が行う振り返りアンケートも、図 15 のように二次元コードで各学級のテレビを通じて配信され、それを生徒たちがタブレットのカメラで読み取り、アンケートフォームを使うことで、振り返りができるようになっていた。アンケートフォームや二次元コードの準備も「しおさい部」が行っているとのこと、担任に任せるのではなく、学校全体で組織的に「スリンプル・プログラム」のサポート体制ができていることを感じた。



図 11 各教室にあるお題ボックス

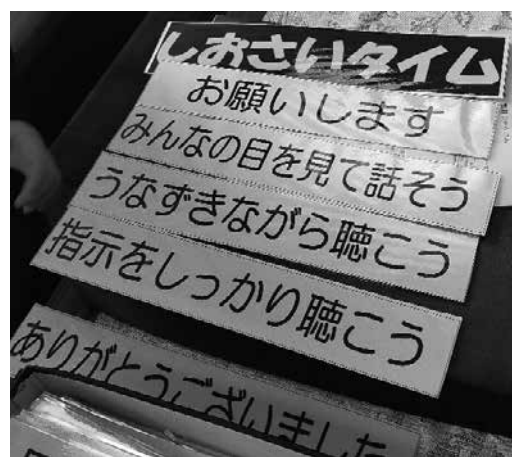


図 12 お題ボックスの内容



図 13 各教室での活用例



図 14 アンケートの二次元コード

■教職員の“一枚岩”をめざす 校内研修の充実

教職員の人事異動によって、学校で継続してきた取組が途切れることは、「スリンプル・プログラム」に限らず、様々な学校の取組において起こりがちな事象である。実際に、一色中学校でも一度は「スリンプル・プログラム」の実施方法などが乱れたことがあったとのことだった。お話を伺った教頭は、以前一枚岩で取り組んでいた頃と、取組の一枚岩体制が崩れてしまった頃とい

ずれの状態も経験しておられ、とても興味深い話を伺うことができた。教頭はその経験を基に、一枚岩が崩れていった原因を次の四つの視点で挙げていた。

【一度構築した「スリンプル・プログラム」の一枚岩が崩れた要因】

- ・人事異動で替わる教職員に対する「スリンプル・プログラム」の目的等の周知不足
- ・「しおさいタイム」に関する研修の不足
- ・準備不足による教職員の負担感
- ・生徒が安心して取り組めない不揃いな「型」

『超多忙でも実践できる！スリンプル(スリム&シンプル)・プログラム
週1回10分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる』pp95-96

この反省をもとに毎年4月に異動してきた教職員に向けての校内研修を企画し、「スリンプル・プログラム」の意義や活動の意味を伝える活動も行っている。また、年2回、曾山教授にも「スリンプル・プログラム」の意義や実際の指導の様子を観察してもらい、スーパーバイズを受けることで、プログラムの質や運用方法を担保しているとのことであった。

一色中学校の「曾山先生に学ぶ」と題された研修では、全学年全クラスで「スリンプル・プログラム」の公開授業が行われ、実施時間をずらすことで互いに授業を参観しあい、その後に曾山教授から「スリンプル・プログラム」の理解講座に臨むなど、教職員全体で取り組んでいる様子が印象的だった。

その他、七宝中学校では他校からの「しっぴータイムを紹介してほしい」という依頼に応えるため、しっぴー部会担当が講師として出向くなど、校内だけでなく、地域に広めるための拠点としての活動も行っているとのことだった。

■各教科等の授業場面でも使われる「〇〇トーク」

- ・「しっぴータイム」の型を使った話し合い活動を「しっぴートーク」と呼んでいます。各教科の授業のほか、部活動のミーティングや練習試合時の作戦会議、委員会活動等でも行っています。スリンプルは「〇〇タイム」と「〇〇トーク」の2本柱で構成されるプログラムです。「しっぴータイム」で養われた「話し方・聴き方」等のスキルをさまざまな話し合いの場面で活かしてこそ、真のスキルとして定着するのです。

『超多忙でも実践できる！スリンプル(スリム&シンプル)・プログラム
週1回10分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる』p20

この週1回10分間の「〇〇タイム」、ソーシャルスキル・トレーニング(SST:social skill training)と構成的グループエンカウンター(SGE:structured group encounter)に取り組んで、つけた力を授業などの他の場面でも活かせるというのが大きな特徴だが、実際に七宝中学校で道徳科の授業を参観させていただいた折にも、教職員が「じゃあ、このことについてしっぴートークで話して、グループで意見をまとめてみて」(図15)の声かけで、素早く机を寄せ合い生徒が互いの意見を伝えあい、しっかりと傾聴し合っている姿を見ることができた(図16)。また、各

グループの意見をミニホワイトボードにまとめ、発表した後に拍手が長く続いた。互いの意見を尊重して、互いの意見を認めあっている姿も印象的であった。普段の「しっぴータイム」で培った基盤があるからこそ、意見を伝える、聞くといった基本的なかかわる力が培われていると感じる場面であった。



図 15 授業中のしっぴートーク



図 16 互いの意見を傾聴する姿

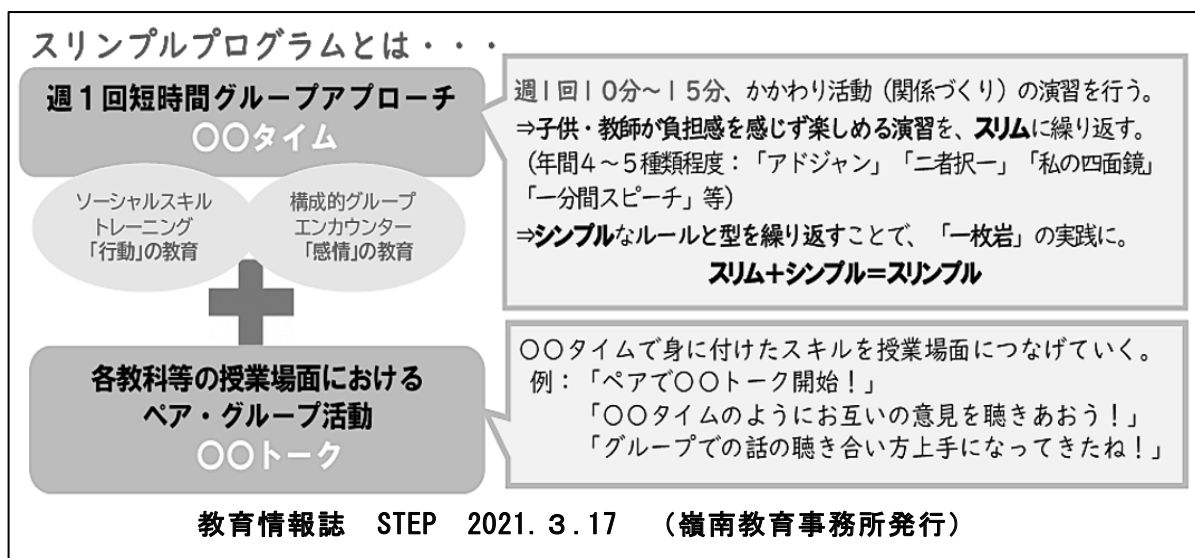


図 17 「スリンプル・プログラム」の二段構え構造

■「スリンプル・プログラム」実践校の視察

・年に数回、本校教職員が実践校の視察を行います。学校ごとに個性があり「演習の中で相手の名前を呼ぶ」「相手のよかったところ伝え合う」等、本校との違いも見られ、「本校でも導入しようか？」などと、よりよい「しっぴータイム」づくりに向け、しっぴー一部会で検討しています。

『超多忙でも実践できる！スリンプル(スリム&シンプル)・プログラム

週 1 回 10 分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる』 pp20-21

七宝中学校で先に実施されていた「しっぴー部会」の実践に学び、一色中学校で「しおさい部」ができたように、いずれの学校でも、「自校よりも先進的に取り組んでいる先進校から学ぶ」ということを大切にしているとのことだった。愛知県内では「スリンプル・プログラム」に先進的に取り組んでいる学校も多く、「伝統校」と呼ばれるこの2校であっても、新しく赴任した教職員との意識の差や実践経験を埋めていくために、他校の実践発表会などにも積極的に参加しているよ

うだった。今回の取材の依頼にも快諾いただくなど、自校のみならず、学びを受け入れ、広めるという立場も担っていることを感じた。

このように、その地域地域で拠点となって取り組んでいる学校の実践に周辺校が学び、さらによりよいやり方が広まっていくというやり方は、今後当センターが「スリンプル・プログラム」を広めていく際にも参考になると感じた。

島根県では、出雲市教育委員会がその拠点となって「スリンプル・プログラム」を広めていこうとしているということも取材の中で分かった。他県の先進校とは違うアプローチでこのプログラムを広めようとしている出雲市教育委員会など、県内の学校の取組も取材することにした。

②出雲市教育委員会の取組に学ぶ

ア 取組の概要

出雲市教育委員会では、平成 31 年度より「人間関係づくり・対話力育成の取組」として『『だんだんタイム』プロジェクト事業』を展開している。事業 1 年目は研究推進校の中学校区で行い、その後、学校からの申請によって市内全小中学校での実施を目指している。令和 5 年度現在、市内小・中学校の 8 割以上(47 校中 39 校)が取り組んでおり、令和 6 年度に向けて全市での展開をお願いしているとのことである。

出雲市では以前より「通常の学級における何らかの支援を必要としている児童生徒」「不登校児童生徒」の増加が課題となっていた。特別支援教育講座の講師をお願いしていた曾山教授より「多くの課題は児童生徒のかかわりの力（自尊感情・ソーシャルスキル）の欠如に要因があるのではないか」とのお話があり、事業の立ち上げにつながったとのことである。

イ 出雲市教育委員会のサポート

「人間関係づくり・対話力育成の取組（だんだんタイム）」

【取組のねらい】

- (1) 発達障がい等に起因するソーシャルスキルに関する児童生徒の困り感の改善・克服や自己肯定感の向上を図る。
- (2) ソーシャルスキルの向上とよりよい学級集団づくりを行うことによって不登校・いじめ等の未然防止を図る。

【実施内容】

週に 1 回 10 分の「短時間グループアプローチ（だんだんタイム）」を生活時程の中に設定し、年間 20 回程度の実践を行う。

【目指す姿】

- | | |
|---------------|-------------|
| ・自分に OK が言える子 | ・安心できる学級、学校 |
| ・学びに向かう素地の底上げ | ・不登校「0」 |

実施校へのサポート体制について、主に次の三つが用意されている。

- ・短時間グループアプローチ（だんだんタイム）の実施に関する情報提供
- ・市教委指導主事による事前体験型研修の実施
- ・短時間グループアプローチの実践映像の公開

新規に取り組む学校には、年度初めに担当指導主事による事前体験型研修が行われ、「だんだんタイム」の理論や方法について説明がある。その際、活動の流れや指導のポイント、指導上の留意点などがまとめられた「だんだんタイム概要版（図 18）」が配布され、実施の際に確認しやすくなっている。また、出雲市教育委員会のポータルサイトに各種ワークシートや実践映像が格納されており、いつでも確認できるようになっている。

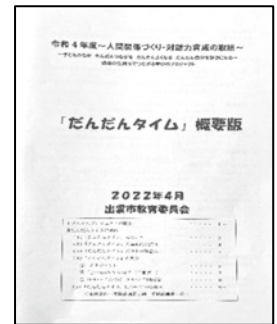


図 18 出雲市教育委員会のだんだんタイム概要版

ウ 成果と課題

出雲市教育委員会の担当指導主事は、「だんだんタイム」について次のように述べている。

- ・事業評価はアンケート Q-U と事後アンケートにより行っている。
- ・図 19 の出雲市の 3 年間の Q-U の結果では、学級生活満足群の割合が増え、非承認群や侵害行為認知群、学級生活不満群の割合が減ってきている。このことから「だんだんタイム」が一助となり、児童生徒の自尊感情やソーシャルスキルの向上が図られてきていることが、自己肯定感の向上に寄与していると捉えている。
- ・学校で過ごす児童生徒にとっては人間関係づくりだけでなく、学習の素地としても効果が表れている。今年度から実施している学校の教職員のコメントにも「ペアやグループ学習の際に、自主的に関わりをもととする姿が見られる。」「ペアやグループでの対話が、スムーズにできるようになってきたと感じる。」とあり、授業中にペアやグループ活動でのかわり方の指導をする必要がなくなることも、この取組の成果と言える。
- ・一方で、「だんだんタイム」で約束としている「あいさつ」「傾きながら聞く」「支持をしっかり聞く」というソーシャルスキルの部分については、「だんだんタイム」ではできていても日常の姿へのつながりが実感として大きくは感じられない。また、実施校からは「だんだんタイム」に対する教職員のとらえ方の差や、活動のマンネリ化についてのコメントもあり、次年度、出雲市教育委員会の研修で解決を図っていく。

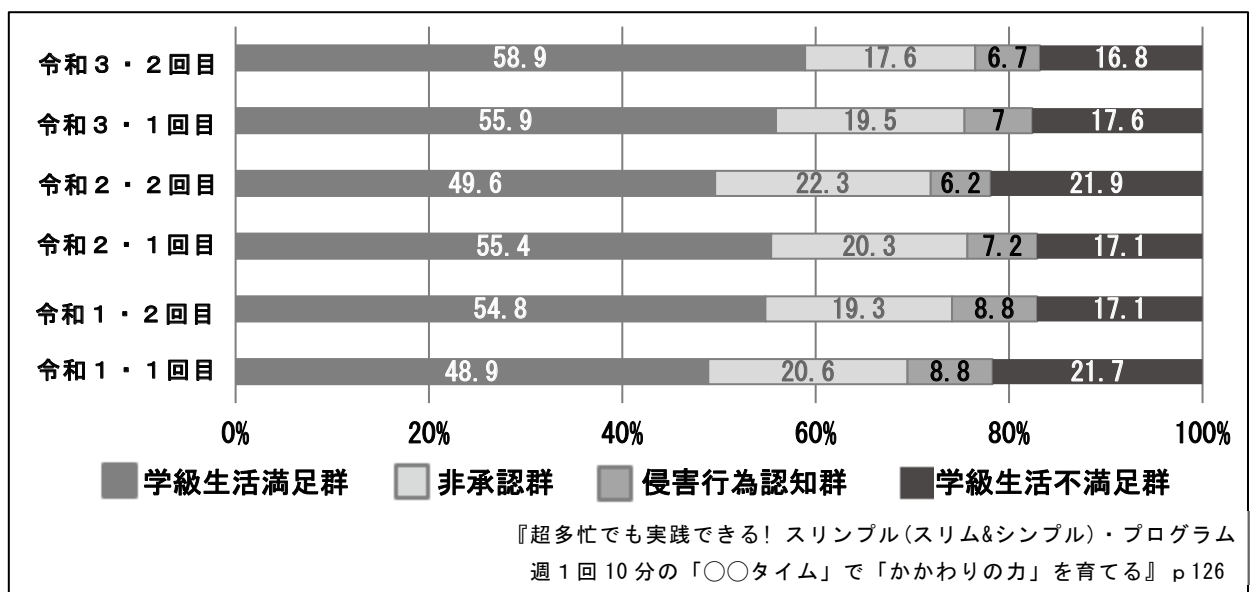


図 19 出雲市のアンケート Q-U テストの 3 カ年の比較

エ 当センターとして参考にしたいこと

この「だんだんタイム」は出雲市教育委員会の事業ではあるが、実施は各学校の自主性に任されている。市内すべての小中学校にそのよさや効果を伝え、実施を希望する学校には担当指導主事の手厚いサポート体制が準備されている。事前の体験研修は担当指導主事が学校に出向いて行うが、困ったときに確認できる Q&A や各種資料、実践映像など、各学校が自走できるよう準備されている。

今後、当センターとしてどのようなコンテンツの制作が可能か検討していく際、出雲市教育委員会の取組は大変参考になると思われる。

③益田市立東陽中学校の取組

ア 取組のはじめにあたって

益田市立東陽中学校は益田市の西部にある各学年 2 クラス、特別支援学級 4 クラスの中規模校である。令和 4 年度に当センター長期研修員であった木村教諭が在籍しており、現 3 年生は、木村教諭の研修の一環として、令和 4 年度の 1 年間「スリンプル・プログラム」に取り組んできた。今年度、木村教諭が所属校に戻り、学校教育目標(図 20)の実現を目指し研修成果を踏まえた実践に取り組んでいる。



図 20 東陽中学校の学校教育目標

1 学期間は木村教諭による全クラスへのガイダンスが行われ、2 学期より、1、2 年生対象に毎週水曜日の朝活動の時間に「陽光タイム」として取組を始めることになった(図 21、図 22)。開始までの具体的な動きは以下の表 4 のようになる。



図 21 東陽中の授業の様子



図 22 お題をディスプレイに映して

表 4 益田市立東陽中学校での「スリンプル・プログラム」実践のあゆみ

R 5 . 3	校内で木村教諭の島根県教育センター長期研修の成果報告会
R 5 . 4 ~	木村教諭が校内の全クラスでアドジャンの実践 (ガイダンス含む)
R 5 . 8	職員会議での共通理解、「陽光タイム」の具体的な計画・内容の決定
R 5 . 9	実践開始

イ 取組の実際

9月から12月現在の取組については、以下の表5のようになる。なお、特別支援学級の生徒については、在籍の交流学級において取り組んでいる。

表5 「陽光タイム」の内容

	9 月	10 月	11 月	12 月
1 年生	アドジャン	2 者択一	2 者択一	いいとこ四面鏡
2 年生			いいとこ四面鏡	1 分間スピーチ
3 年生	生徒会活動を通しての取組			

取組については、木村教諭がパワーポイントで活動の流れやテーマを設定・作成し、全クラスにデータ配信して実施した。11月以降は生徒指導部を主担当とし、学年ごとに取り組む内容を変えることにした。生徒指導主事を中心に資料を作成し、同じようにデータ配信した。

ウ 成果と課題

今の時点で先生方が感じている取組の成果と課題について、インタビューを通して次のようにまとめた。

【インタビュー対象：1年部教諭1名、2年部教諭1名、木村教諭】

○成果

- ・授業の中でグループワークがしやすくなった。「陽光タイムのグループになろう。」と声をかけるとすんなりグループになれる。机をくっつけることが苦手だった生徒もできるようになった。
- ・準備が必要な授業では、以前は座って待つ生徒もいたが、今はお互いに声をかけあって分担を決めながらスムーズに取り組めるようになった。
- ・表現が苦手な生徒には周囲がサポートしたり分かりやすいリアクションを返したりするようになった。表現することが得意な生徒が多い集団だと苦手な生徒が引っ張られて、いい効果がうまれている。
- ・支援が必要な生徒にとっては、「ルールが明確で、取り組むことがはっきりしている」スリンプル・プログラムは分かりやすかった。
- ・中心となって内容を決めたり、資料等を準備したりする人がいるからこそ、やり方や指示の出し方が統一されると同時に、教職員の負担軽減にもなった。
- ・校内の教職員の興味関心は高く、担任だけでなく副担任や他の教職員も陽光タイムの様子を見ることが多い。担任不在時に副担任等が進めることもできた。

●課題

- ・内容（題材）がマンネリ化しやすいので、生徒からも募るようにする等の工夫もしたい。ただし、難しすぎないようにすることは心がけたい。
- ・スタートの時期は4月がいいと思う。新生活での不安を軽減・解消するためにも、この取り組みを通して人間関係づくりをしていけるのではないかなと思う。
- ・朝の時間帯は出欠確認があり教職員も慌ただしい。また、生徒も朝からエネルギーを出しにくい子も多い。時間帯の検討は必要だと思う。ただ、学級の実態によっては、朝の時間帯の方が落ち着いて取組に向かいやすい感触がある。
- ・職員室での立ち話程度の情報共有はあるが、時間をとってしっかりとクラス間での共有はできていない現状がある。

【インタビュー対象：管理職】

○成果

- ・昨年度から取り組んでいる３年生は、人間関係の悩み等で教室に入りにくい生徒や不登校傾向等の生徒が減っている。
- ・他の要素もあると思うが、３年生として生徒会活動等で自分たちから後輩にかかわっていく姿は、スリンプル・プログラムで培われたものではないかと感じている。
- ・教科の授業では、まだかわりが難しい場面がみられる学級も、「陽光タイム」の時間には自然にかかわれるようになってきており、少しずつ効果が表れているように感じる。
- ・「陽光タイム」はかかわる力に特化した時間。学習に向けての土台づくりになっている。
- ・若手教職員が自主的に集まり、内容（題材）等について学年部を超えて話し合う雰囲気がある。
- ・次年度に向けて、教職員の構成が変わっても取組が継続するように生徒指導部の柱として取り組んでいる。

●課題

- ・自分たちで関係を作ることが難しい生徒もおり、「陽光タイム」のような場を設定することは必要だと思う。
- ・小学校時代にすでに関係が固定化されてしまっている場合には、アドジャンなどの活動も難しいことがある。小学校でも取り組めるとさらに効果があると思う。
- ・導入の際、中心となって進める教職員の負担が大きかったのではないかな。校務分掌として組織的に取り組んでいきたい。

エ 今後に向けて

実際に取り組んでみて４か月程度ということもあり、具体的に見える大きな変化は今のところは少ないとのことであったが、実際に陽光タイムの様子を見たりインタビューをしたりする中で、成功に向けてのいくつかのキーワードが見えてきた。

一枚岩になるために

職員会で管理職から取組について話があったので、その後の動きがスムーズだったという状況からも、新しいことに取り組む際には中心となってまず声をあげる存在が不可欠であることがうかがえる。また、実際の取組にあたっては、取組の内容を考えたり準備をしたりすることが必要になってくる。木村教諭だけではなく、校務分掌（生徒指導部）として組織的に取り組んだことで、他の教職員も「自分たちの取組」として前向きに取り組める校内体制や雰囲気を作ることにつながったと考える。

実態や状況に応じた工夫

学年部や学級によって生徒の状況や全体の雰囲気は異なってくる。今回、学年や学級の実態に応じて取組の内容を変更している様子も見られた。また、同じことをしていても緊張感の強い生徒が多く在籍している学級では、グループにならずに全員が前を向いてペアで活動している様子も見られた。「この取組を通して人間関係づくりをスタートさせる」という目的をもっている教職員もいれば、「ある程度の人間関係ができてい部分にさらにプラスする」という目的をもっている教職員もいた。それぞれの学級の実態や状況に応じて、取り組みやすい工夫をしたことが、無理なく取り組むことにつながったのではないかと考える。

取り組み始めたばかりではあるが、校内ではプラスのこととしてとらえられている様子が分

かった。来年度は4月当初からの実施を予定しているとのことで、実際の「陽光タイム」での取組に加えて、校内体制づくりをどのように進めていくのかがポイントになると予想される。

5 実践および研究の考察とまとめ

(1) 今年度の取組を振り返って

島根県内のほとんどの学校に不登校の児童生徒が在籍している。その児童生徒の学びの保障のため、登校できる環境を整えるために、別室や学習室を設けたり、スクールカウンセラーとの相談につなげたりして、何とかより良い状態を目指そうと取り組んでいる学校がほとんどである。また、不登校に至らなくても、学級の中では生き（行き）辛さを感じていたり、集団への関わりにくさを感じていたりしながら登校している児童生徒もいる。

当センターの相談室で出会ってきた多くの不登校の子どもたちや保護者、それを支える教職員の相談に寄り添う中で、再登校につながっていったケースも多くある。集団になじみにくい、学校に行きにくくなるという事後の相談という形ではなく、より積極的な形で、学校現場の学級づくりや仲間づくりを支えていきたいと考えてもいた。その一つの方法として、「スリンプル・プログラム」について学び、2年間の実践研究を通して、学校現場に学級づくりや仲間づくりの機運を高めていけるかと考えつつ、今年度の実践研究をスタートした。

初年度である今年度は、教職員の抱えている悩みや、学級づくり、仲間づくりについての意識調査を行ったり、先駆的な実践を行っている先進校および教育委員会、これから「スリンプル・プログラム」の実践を積み重ねていく学校に取材を行ったりして、様々な基礎調査ができた1年だったと感じる。

今年度の取組を振り返るとともに、次年度に向けての課題を整理したい。

①教職員の困り感や学級づくり等についての意識調査から

教職員を対象に実施した意識調査では、経験年数に応じた学級づくりや仲間づくりに関する様々なニーズや教職員の意識について知ることができた。今回はあくまでも任意の調査ではあったものの、回答の傾向を考察することで様々な傾向や、これから次年度の実践に向けて取り組むための指針を立てるための貴重な資料を得ることができた。ここでは意識調査における各設問項目の関連から次年度につながる傾向を考察したい。

- ・設問2「学級づくりや仲間づくりで難しさを感じているか」と設問4「業務上困っていることは」の問いに対する回答からは、「学級づくりや仲間づくりに教職経験が少ないほど、難しさを感じている」という相関関係があり、学級づくりや仲間づくりへの課題の感じ方には、やはり教職経験年数に依るものが大きいと考えられることが分かった。教職経験の浅い教職員ほど「学級づくりや児童生徒の仲間づくり」に困難を感じていることを踏まえると、そのような教職員などに向けての「集団づくりプログラム」の提供は、教職員のニーズにもマッチすると考えられる。
- ・設問5「うまくいっている学級づくりのキーワード」として、やはり「人と人との関係性」に関わるワードが多く、「スリンプル・プログラム」がねらっている「児童生徒同士及び教職員との関係づくり」に合致していることがわかった。この「スリンプル・プ

ログラム」の取組が広く浸透していくことで、教職員が抱えている、うまくいく学級づくりへの具体的な働きかけにつながることを考えられる。

- ・設問6「週1回10分程度のプログラムを継続的に実施することは可能か」の問いに、6年目では、実施可能であると回答している教職員が約90%おり、6年目と中堅については、困り感からくる研修ニーズも高いことが予想される。そのため各学校における実践にあたっては、先進校で取り組まれているように、若手からミドルリーダーの自発的な「スリンプル・プログラム準備部」が形成されていくことも望ましい進め方であると考えられる。また、設問7の「スリンプル・プログラムを知っているか、あるいは取り組んだことがあるか」でも中堅、6年目では取り組んだことのある経験のある教職員が一定数いる。新任では知ってはいるものの経験している教職員はない。校内のOJTを活用し、困り感を感じている若手を中堅以降の教職員がこのプログラムを中心に引っ張っていくことも期待される。

②各取材から

先駆的に取り組んでいる学校や教育委員会への取材からも多くの学びを得ることができた。東陽中学校では、一人の教諭の実践から学校全体への取組と広がった。これは、当センターで実施している能力開発研修「学級づくり仲間づくり講座」に一人の担任として受講し、まずは自分の学級からやってみたいが、ゆくゆくは学校全体でも取り組みたいと考えた受講者にとって大きなヒントとなりうる事例である。学校全体として取り組むことで大きな成果が得られることは、全国の学校の実践からも明らかであるが、まずは自分が担任する学級で実践し、そのよさを周囲に伝えていくという広がりを目指す先生方に、当センターとしてできることも考えていきたい。

出雲市教育委員会では前述のようにアンケート Q-U を活用した分析も行っていることもあり、すでに「スリンプル・プログラム」の有効性を客観的に分析している。不登校児童生徒の増減との関連をみることは難しいとのことだが、通常学級における特別支援の視点ももって事業が進められており、今年から実施している学校からは学級内での雰囲気がよくなったとの声も多いそうである。

県内にこのような先駆的な取組を行っている教育委員会があることは、実践を学ぶ上でとても貴重なことであり、各学校での「スリンプル・プログラム」の導入と普及を支援していく立場という意味においても、当センターが目指しているスタンスと同じ取組をしている先行団体でもある。ぜひ、学校の伴走者としての在り方についても次年度も継続して学ばせていただきたいと考えている。

また、愛知県の実践校は曾山教授から伝統校と称され、10年続いている。このような先進校の実践を紐解くことで、新しく始めた学校が直面する「職員の意識の差」や「マンネリ化」の解決にむけたヒントを見つけることができるのではないだろうか。

(2) 2年次の実践研究に向けて

今年度の実践研究をベースに2年次に向けては、より積極的に学校現場に広めていくための伴走の体制を整えたいと考えている。

これから「スリンプル・プログラム」を導入していこうとする学校との連携を図り、今年度の蓄積したノウハウや先駆的に取り組んでいる学校や教育委員会から学んだ知見を、導入する学校に持っていけるようにしたい。また、今回の研究紀要では記事としては割愛させていただいたが、何度も訪問させていただいた雲南市教育委員会「不登校対策プロジェクト」の取組における、中学校から校区の小学校へ広めていく展開の事例について次年度も学ばせていただければと考えている。

能力開発研修では、引き続き「スリンプル・プログラム」に関連する研修を継続して設け、実際に曾山和彦教授に指導していただく機会の創出により、多くの受講者を通じて各学校でのプログラムの展開を期待したい。

また2年次は、「不登校の未然防止」の観点だけでなく、このプログラムを導入することによって教職員や児童生徒にとってどのような心情の変化があるのか、児童生徒同士のかかわりに変化があると感じられるのかなどを、実践協力校を設定し、定期的にアンケートなどを実施して、その効果を明らかにしていければと考える。

以上のことを中心に、「スリンプル・プログラム」による「かかわりを深める活動」が、学校の継続的な取組となるよう、当センターとして展開を考えていきたい。当センターはあくまでも伴走者ではあるが、学校現場での人間関係がより良くなることが、不登校の未然防止に通じる第一歩だと考えている。

最後に、この実践研究に多くの助言をいただいた曾山和彦教授、取材に応じてくださった愛知県あま市立七宝中学校のみなさん、愛知県西尾市立一色中学校のみなさん、出雲市教育委員会、雲南市教育委員会、益田市立東陽中学校のみなさんに改めて謝辞を伝えたい。

【引用文献】

- ・曾山和彦(2023) 『超多忙でも実践できる！スリンプル(スリム&シンプル)・プログラム 週1回10分の「〇〇タイム」で「かかわりの力」を育てる』ほんの森出版 pp20-21、pp95-96
- ・島根県教育委員会子ども安全支援室(2022)「令和4年度生徒指導上の諸課題に関する状況について」
<https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/anzen/ijime/mondaikoudouchosa.html>
(2022.1.26 確認)
- ・東京都教育庁指導部(2022)「教職員向けデジタルリーフレット『生徒指導提要(令和4年12月)』のポイント」
https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/school/content/leaflet_seitoshidouteiyou.html
(2022.1.26 確認)
- ・嶺南教育事務所発行(2021.3.17) 教育情報STEP

【参考文献】

- ・曾山和彦(2021) 「気になる子」が通常学級に溶け込む!10の理論・10の技法. ほんの森出版
- ・曾山和彦(2019) 誰でもできる!中1ギャップ解消法. 教育開発研究所
- ・文部科学省(2022) 生徒指導提要(改訂版)
- ・愛知県立あま市立七宝中学校 校内研究資料
- ・愛知県立西尾市立一色中学校 校内研究資料

